



水都・大槌で湧水一斉調査

～湧水の水位は上がるのか～



世界初の湧水一斉調査

古くから暮らしに根付いてきた湧水を記録しようと、町教育委員会は5月19日(日)、中心市街地だった町方地区で、湧水の水位や水温などを初めて一斉に調査しました。湧水地は3分の1ほどが、区画整理事業の対象になっている地域にあります。これらの地域は、2メートル前後の盛土が予定され、復興が進むと、湧水地が埋もれて消滅することが懸念されています。調査にあたった町民やボランティアからは、改めて「水都・大槌」を見直し、湧水をまちづくりにかかしてほしいという声がありました。

町の湧水は、名古屋市の大同大学工学部の鷺見哲也准教授が継続して調査してきました。鷺見准教授によると、湧水は、これまで170カ所で確認され、最終的には200カ所を上回ると見られています。

湧水は生活用水として利用されていただけではなく、希少魚「淡水型イトヨ」の生息や、豊かな漁場の形成を促しています。

今回の一斉調査は、鷺見准教授が指導しました。56カ所の湧水地点で、同時に水位を測り、水温、水質を検査し、溶けている物質を分析するために採水を行いました。参加したのは町民や全国からのボランティアら約210人。「湧水のまち」として知られる愛媛県西条市、また東京都東久留米市からも多くの参加者がありました。正午に、「ひよっこ



各湧水地の水位、水温を図面にまとめる参加者

りひょうたん島」の主題歌のメロディーが流れると、湧水地点で、一斉にビニールチューブを使って水位を測定しました。

今回の測定や過去の測定結果から、地下水は海に向かって流れ、水位は干潮や満潮の影響を受けること、水温は平均して11度前後であることが確認されました。

湧水は、震災後も、こんこんと湧き出ていて、湿地帯になっている場所もありました。参加者は調査を通して、震災前の豊かな水の恵みを実感しました。

埼玉県和光市から参加した須貝郁子さん(66)は「水がすぐく冷たいのに驚きました。湧水地が姿を消してしまうのは、もったいない。町の宝です」と話していました。

参加者は、測定値を報告後、町役場隣の体育館で開かれたシンポジウムに参

加しました。シンポジウムでは、京都市の総合地球環境学研究所の谷口真人教授が「大槌湾の海底にも多くの湧水があつて、地下水が森と海をつないでいる。湧水は大槌に人を呼び寄せる力になる」と強調しました。また、イトヨを研究している岐阜経済大学地域連携推進センターの森誠一教授は「地域の文化としてイトヨと湧水を守ってほしい。この財産をまちづくりに生かしてほしい」と訴えました。

調査を主催した町教育委員会の佐々木健・生涯学習課長は「参加者全員で湧水地を確認でき、湧水に対する思いを共有できた。貴重な文化財として、記録保存し、未来に残したい」と語っていました。

暮らしに根付いてきた湧水

大槌町の町方地区では、湧水を生活用水として利用していました。飲用水にし、炊事、洗濯で使い、日常生活と切り離すことができませんでした。

町議の後藤高明さん(76)も、湧水で育ちました。「近所の人たちがバケツでくんで、台所のカメに入れて利用していた。年中、水温は変わらなかった。盛土で埋めてしまわずに残してほしい」

一斉調査の参加者は、湧水を飲んでみました。一関市から参加した小山みね子さん(45)は「軟らかい味でおいしかったです。この湧水でコーヒーを沸かして飲んでみたい」と話していました。

大同大学工学部

鷺見 哲也 准教授



大同大学工学部の鷺見哲也准教授は、10年ほど前から、大槌町の湧水調査にかかわり、2003年度に、「湧水環境調査報告」をまとめています。鷺見さんは湧水一斉調査後に、次のように話していました。

「今回の調査は科学的なデータを得ることと合わせて、参加者の方々に、数多くの湧水が存在することを知っていただき、湧水と親しんでいただく目的がありました。調査地点にはピンクの旗、それ以外の地点には黄色の旗を立てました。津波から残った建物の屋上から見渡しましたが、ピンクと黄色の旗が立ち並び、感動しました」

「湧水は豊富で、しかも、水温は年間を通じて11度前後と一定しています。水質も良好です。ヒートポンプによる空調システムに利用できるなど、極めて利用価値が高い。復興の際のまちづくり出来るだけ生かす工夫をすべきでしょう」